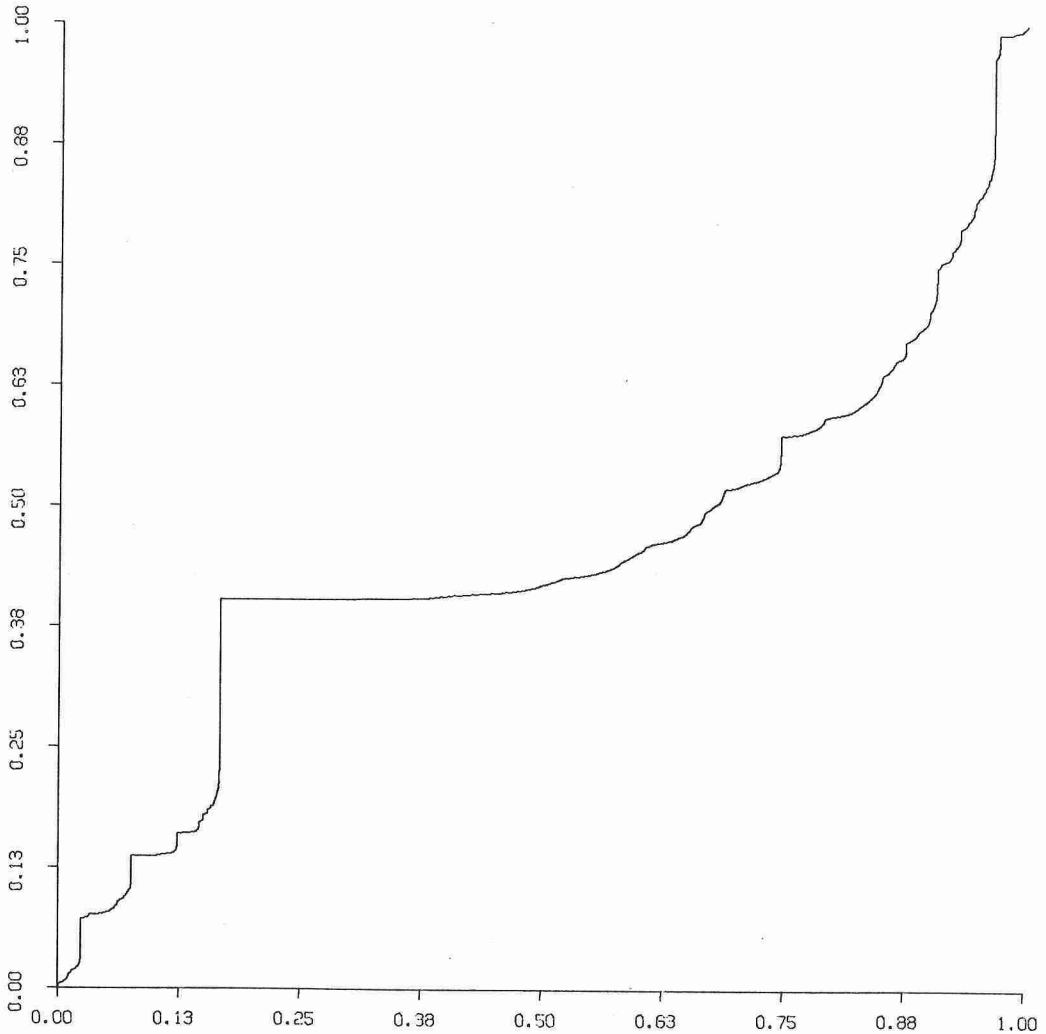


# 廣報

東京大学理学部

BERNOULLI NUMBERS FRACTIONAL PARTS DIST.



## 目次

新谷卓郎氏のこと .....	飯高 茂 .....	2
タワ言 .....	新谷 卓郎 .....	3
理学部留学生懇親会 .....		4
<学部消息> .....		5

## 直観力のエラー（表紙の説明）

ベルヌーイ数という、変な有理数の数列  $\{ B_n \}$  があります。定義は、母関数により、

$$t / (\exp(t) - 1) = \sum_{n=0}^{\infty} B_n t^n / n$$

で与られますので、必要に応じて計算することは容易です。即ち、 $B_0 = B_1 = 0$ ,  $B_2 = 1/6$ ,  $B_3 = 0$ ,  $B_4 = -1/30$ , ……。一般に、奇数の  $n$  については、 $B_n = 0$  となりますから、 $\{ B_{2k} \}$  を調べればよいわけです。 $B_{2k}$  の非整数部分を  $b(k)$  と書くと、 $b(k)$  は、意外にも簡明に求められます。即ち、 $p-1$  が  $2k$  を割り切る素数  $p$  をすべて求めるとき、それらの逆数の和に  $B_{2k}$  を足すと整数になることが知られているのです。例えば、2 の約数は 1 と 2 ですから、 $p=2$ , 3 がとれて、 $1/2 + 1/3 + 1/6 = 1$  となり、4 の約数 1, 2, 4 に応じて  $p=2, 3, 5$  をとれる等々・問題  $b(m)$  の分布はほぼ何か？

そこで、 $x$  をきめたとき、 $\{ m \leq x \mid b(m) < z \}$  の元の数を  $A(x, z)$  とかき、 $F_x(z) = A(x, z) / x$  と定義し、この関数を調べようというわけである。 $F_x(1) = 1$ ,  $F_x(0) = 0$  は自明。 $b(m)$  はどうせ、極めて複雑だから、 $F_x(z)$  はほぼ  $z$  になると、大方の数学者は予測するのだが、実はこれがひどいまちがいであり、 $x = 1000$  のときのグラフが表紙のそれである。この様子では、どんな予想もゆるさない分布と考えられる。しかし、 $F_x(z)$  は  $x \rightarrow \infty$  のとき、収束し、関数  $F(z)$  が定まる。 $F(z)$  は、自然の関数でありながら、その挙動は、極めて奇怪であり、この複雑さをもたらすベルヌーイ数こそ、Fermat の大定理解決の鍵であることを思うと、切ない思いにかられる。

資料は、イリノイ大学の Wagstaff 教授の提供による（イリノイ大学数学雑誌 24（1980）所収）。

## 新谷卓郎氏のこと（個人的思い出）

飯 高 茂

（去年11月14日に急逝した理学部助教授新谷卓郎氏の追悼文が遅れてしまいました。おわびします。）

彼が逝って半年以上たった現在でも、私は彼の死という現実を受け入れ難く思う。数日前にも彼は夢の中に現れた。やゝうつ向きの顔で、向こうを見ている。「なんだ、すっかり元気になったじゃないか」と声の大きさに明かるさを表現して背をたたくと、彼は無邪気な笑顔になった。そして、私は現実に戻され、4時前であることを知った。もう入眠できなかつた。

新谷卓郎氏は昭和36年3月に都立大泉高校を卒業し同年4月、東京大学理学科1類に入学した。S I 15 B組であり、私も同じ組に新入生としていた。彼の強烈な第一印象を忘れ難い。当時、既に珍らしかつた角帽をかぶり、度の強い眼鏡に、大きな瞳、何かぎごちのない一挙手一投足！そして、じきに、彼の精神には無類のナイーブさと、底知れぬ無邪気さがあることを知った。私達は、数学や語学の授業でよく隣り合せに座わり、数学の専門書を読んだ感想や、それへの憧れを語り合った。そして、段々と、彼の数学的才能の凄さがわかってきた。というのは、彼は、初めのうち、ものわかりが悪いのである。のみ込みが悪く、本を読むスピードが遅い。その代り、その内容を徹底してものにし、著者の意図した以上のものを把握している。私は、何度も打ちのめされた気になった。数学者とは、彼のような人だけに約束された仕事であると、つくづく思った。

2年生の夏には進学生を確定せねばならない。私は、高校の数学の先生にでもなろうと思ひ、数学を進学先にきめていた。所が、彼は、物理数学のようなものならできるとも思ひ、とかいって、物理科を選ぶという。そこで、「数学がいい

と思うよ、実験がないしね」とかいって説得に努めた。確か、彼は初めに、数学へ進学を希望して届け、物理に変更し、更に、もう一度数学科に変更届けに行ったのである。その最後の夕方、彼に あつたら、「実はもう一度、事務に変更したい、といつたら、いい加減にしなさい、と叱られた」というのである。私は、秘かに、そして、何人かにかこう言つた「僕の数学への貢献は、新谷卓郎氏を数学科に入れたことですよ」と。

それから去年11月迄、18年に亘つて、彼とは殆んど同じ所にいた。大学院は無論の事、助手に採られたときも、理学部専任講師になつたときも一緒にあつた。初めての海外生活を、同じときに同じ所、即ちプリンストンの高等研究所でおくり、帰国後には、一号館で同じ室をオフィスに用いた。5号館建設に伴い室屋割をきめるとき、彼は、私の隣りに自分の室を選んでくれた。

個人的思い出はつきることがない。しかし公器としての本誌の頁をさくことはもうできない。氏の学問的業績は世界的であり、第一級のものであるが、極めて専門的だから、説明をさし控える。リー群のユニタリ表現の研究から、概均質ベクトル空間のゼータ関数の解析的及び数論的研究を経て、広い意味での解析的数論が彼の得意な分野であつた。

最後に、新谷氏が学部4年のとき、旧S I 15組のものが作つたクラス雑誌に寄稿した一文を再録するので、若い学生、研究者に是非読んでほしい。

## タ　ワ　言

理学部数学科 新 谷 卓 郎

1. 小学校に入学してから今迄通算16年間学校教育をうけてきた。いろいろなことを学習したはずである。日本語は赤ん坊のときから習ってきた。学校に入ってから読み書きをならい日常不自由しない程度には習得した。しかしながらいままでどれだけの詩歌小説を読んだか？明治以降の著名な作家の作品ですら極くまばらに読んでいない。外国文学の翻訳についてもしかりである。まして日本古典や中国古典の原典にいたっては受験の関係でそのささいな断片にいやいや接したにすぎない。外国語はどうか英語は中学校から大学2年まで実に8年間も習ったわけで英文はなんとか読めるようになった。しかしそのスピードたるや小説や新聞を読むには到底実用にはならない程度にすぎず、会話作文はできない。ましてドイツ語以下の諸外国語に至っては特殊な分野の文献がなんとか読めるという程度にすぎない。いかなる国にせよ、その古典の原典に接したことはない。以上全く僕個人についてはなしである。しかしかなり多数の人が同じような状態にあるのではないだろうか。つまり東西どちらの文化にせよ、その基盤にある古典からはじめてじっくりと学ぶということはしていないのである。

明治以前の日本の正規の教育は、四書五経などをじっくりとたたきこむことから始めたらしい。中国から輸入され、それから千数百年にわたって消化発展されてきた文化をその根底から学んだわけである。幕末明治初期の人々はそういう根深い教養を背景に西歐文化を学んだのであろう。現代の正規の教育を受けた標準的レベルの人間は、その教育の根深さにおいて明治以前のそういう人々に比べて遜色があるのではないだろうか。維新当時活躍した人々の写真を見るとどうも現代の政治家より堂々としたりっぱな風貌をしているように

思われる。

2. 人間の生活には名目上の核心がある。それは何かときかれれば、学生なら各人の専攻分野の勉強と答えるだろうし（スポーツないし政治運動と答える人もいる）職業人なら各自の従事する職業と答えるだろう。ここで2つの本質的に異なった類が存在するように思う。一方にとっては、その核心は胸おどらされるあこがれ、ファイト、スリル、失望といったものの源泉であり、心がそこを離れるのは、例外的な場合で、彼等には、時間の流れは非等質的である。他方にとっては、その核心は義務であり routine でありいかに彼がそれに勤勉に従事し、多大の時間をさこうとも、彼は「俺はこれだけやった、これだけかどった」といった征服感に類似の感情を感じるのが主で、食事の時は食事に専念するし、テレビも面白ければ娯楽読物も面白い。僕は数学科に進学したのだから、生活の核心は数学の勉強のほうである。しかしふりかえてみると僕はほとんど常に後者のタイプであった。

3年のときは講義、演習の時間が随分多かったけれど、皆その他に1人であるいは数人で、いろいろな本を読んでいた。僕はどういうふうに読むべき本を選択したろうか。どうも、「これはいずれば勉強しなければならない分野の良い参考書であるから」とか「他の人がこれを読んでいる、そして非常に面白いといっている。」といった選択原理を用いたようである。そして読み始めた本のうち本当に面白いと思ったものもあるけれども、概して、義務観と征服欲で何とか読み進むということが多かった。つまり第2類に属したのである。4年になるとセミナーが始まり、講義は選択となった。事前に勉強したわけではなかったけれども、何となく魅力を感じていたヘルガソンの「微

分幾何学と対称空間」という著書をテキストとする 세미나を選び、一方広くいろいろな方面を知りたいとてかなり手広く講義を聞くことにした。しかし間もなくテキストを少しでも早く通読したいという気持ちになり、講義をフォローするために時間をさく気にはなれなくなった。かくて講義の時間は大部分変じて盲写しの時間となった。世の中にわからない講義を聴き黒板にかかれたことを盲写しするほどつらいことは少ない。こういうノートを見返してみると時たま、二重写しをしていることがある！ 一方セミナリイテキストの方もはやく通読しようという気持ちで読むのだから、本当の意味で面白くは読めなかった。テキストを読み終ってから現在に至るまで相変わらず、第2類にと

どまっていることはいうまでもない。

現在、セミナリイテキストの最後の章にのべられている内容をもっと深く勉強したいと思っている。関係文献を読み、いままでにどのような問題が提出され、どのように解かれてきたか、残された問題は何かを知りたい。関連した部門を勉強したい。つけやきばでない真に生き生きとした知識、理解を得たい。

また19世紀20世紀前半の偉大な数学者の作品を系統的に読んでみたい。いままでの努力はあまりに貧弱であり、心構えは余りに不確かであった。有言不実行に終りませんように！ 有言

(昭和40年1月)

## 理学部留学生懇親会

2月27日5時半から、留学生懇親会が、山上会議所で行われた。学務主任の司会により、野田外国人学生委員、西島学部長の挨拶ではじめられた。35名の留学生と、44名の教職員の出席者があり、盛況であった。3月に帰国する留学生を代表して、黄瑞耀氏(台湾)、M. M. H. Ghoneum氏(エジ

プト)、P. M. Frydl氏(カナダ)が大変上手な日本語(又は英語)でスピーチをした。何人かの留学生が、上手に日本の歌曲を歌うのには感心させられた。理学部からK氏が、民謡を情感豊かに歌い、やんやのかっさいを浴びていた。(い)



## 《学部消息》

### 教授会メモ

3月18日(水) 定例教授会

理学部4号館 1320号室

1. 前回議事録承認
2. 人事異動等報告
3. 昭和55年度卒業生成績決定の件
4. 再入学願いについて
5. 研究生の入学について
6. 研究生の研究期間延長について
7. 昭和56年度日本学術振興会奨励研究員の受入れについて
8. 昭和56年度受託研究員の受入れについて
9. 寄附の受入れについて
10. 人事委員会報告
11. 会計委員会報告
12. その他

なお、当日桑原教授、定永教授、竹内(均)教授、藤原教授、霜田教授、山崎(敬)教授の6教授のご退官にあたり、記念真写の撮影(化学教室中庭、雨天の場合1号館玄関前)及び送別会(午後5時30分より、学士分館・赤門脇)を教授会終了後に開催。

4月22日(水) 定例教授会

理学部4号館 1320号館

1. 前回議事録承認
  2. 人事異動等報告
  3. 研究生の入学について
  4. 奨励研究員の受入れについて
  5. 寄附の受入れについて
  6. 人事委員会報告
  7. 会計委員会報告
  8. 事務委員会報告
  9. その他  
(次回以降予定：定例毎月第3水曜日 13:30～)
- ・5月20日, 6月17日, 7月15日, 9月16日, 10月21日, 11月18日, 12月16日, 昭和57年1月20日, 2月17日, 3月17日
- ・4号館1320号室, 2月17日は化学教室新館5階講堂の予定

### 教室主任・施設長名簿

(昭56. 4. 1)

教室名	主任教官	電話番号	教室名	主任教官	電話番号
数学教室	伊原教授	4048	地質学教室	久城教授	4503
情報科学教室	後藤教授	4113	鉱物学教室	竹内教授	4542
物理学教室	鈴木(秀次)教授	4171	地地学教室	阪口教授	4574
天文学教室	海野教授	4255	臨海実験所	寺山教授	4446
地球物理学教室	岸保教授	4294	植物園	飯野教授	植物教室4465 植物園(814)0138
化学教室	佐佐木教授	4359	地球物施設 研究施設	福島教授	4581
生物化学教室	宮沢(辰)教授	4391	分光化学センター	黒田教授	4331
動物学教室	水野教授	4431	中間子科学	山崎教授	4233
植物学教室	田沢(仁)教授	4457	地殻化学	富永教授	4346
人類学教室	埴原教授	4485	素粒子物理学	小柴数授	4231

教室名	主任教官	電話番号	教室名	主任教官	電話番号
学務長(室)	西島教授	4000	事務長補佐(経理担当)	福井保男	4004
事務長	田村文雄	4001	学務主任	三浦俊暁	4003
事務長補佐(総務担当)	神戸和雄	4002			

## 訃報

・本学名誉教授小倉謙殿（植物学教室）には、かねて病気で療養中のところ、去る3月18日心不全のため国家公務員共済組合連合会立川病院において、ご逝去されました。享年85歳。謹んでご冥福をお祈りいたします。

・本学部元教授富山一郎殿（動物学教室）には、かねてご病気で療養中のところ、去る3月9日ご逝去されましたので謹んで哀卓の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。享年74歳。

## 理学部卒業生氏名

### 昭和56年3月28日卒業生

#### 数学科

豊田 <sup>まさ</sup> 雅 <sup>のり</sup> 孝	中野 <sup>よし</sup> 哲 <sup>しげ</sup> 夫	銀 <sup>ぎん</sup> 林 <sup>ばやし</sup> 純	西山陽文
青木 <sup>よし</sup> 玲 <sup>子</sup>	原岡喜重	久古 <sup>くご</sup> 谷敏行	深谷賢治
江成 <sup>あき</sup> 哲 <sup>昭</sup>	古澤昌秋	後藤 <sup>ひさ</sup> 寿 <sup>し</sup>	藤原靖
落合 <sup>さとし</sup> 聡	松本耕二	清水 <sup>しみず</sup> 富 <sup>もん</sup> 門	馬淵治好
柏木 <sup>かしわ</sup> 有 <sup>吾</sup>	横山和弘	神保秀一	松永隆
唐澤 <sup>からわ</sup> 郁 <sup>はる</sup> 夫 <sup>治</sup>	飯島信也	杉田隆	松本久義
河喜多 <sup>よし</sup> 能 <sup>はる</sup> 治	石原典明	竹内 <sup>のぶ</sup> 宣 <sup>あき</sup> 哲 <sup>し</sup>	三石宣史
河津 <sup>か</sup> 省 <sup>ひろ</sup> 司	井出村重夫	玉乃井 <sup>たまの</sup> 広 <sup>たか</sup> 臣	宮寄洋一
川村 <sup>かわ</sup> 明 <sup>宏</sup>	岩瀬順一	丹原 <sup>に</sup> 大 <sup>ひろ</sup> 介	矢神毅
河村 <sup>かわ</sup> 宏 <sup>彦</sup>	上野一男	中上 <sup>なか</sup> 川 <sup>ろがわ</sup> 友樹	山崎昌男
國府 <sup>くに</sup> 田 <sup>た</sup> 克彦	加藤欣司	中村信彦	山本昌宏
杉山安洋	鎌野創一郎	中山良幸	山本正行
田口仁	北村正裕		

(50名)

#### 情報科学科

坂上秀昭	裏俊男	坂井修一	伏見信也
坂本浩一	青野雅樹	櫻井貴文	松原仁
木下佳樹	來住伸子	清水徹	吉田八穂子
中桐宏樹	神田陽治	関清隆	和田孝
平山賢志	佐藤健	橋田浩一	吉浦裕
山田純	斎藤明	平木英一	

(23名)

物理学科

齋藤知哉	石原照也	須賀隆	中河原幹晴
宇佐美彰浩	磯野秀樹	須藤靖	中村正人
内山光一	岩橋正憲	杉田道昭	春山真一郎
神長達郎	上田良夫	鈴木一明	細井光夫
木村芳文	榎本良治	住山昭彦	真鍋昌彦
久我隆弘	大和壮一	園田英徳	三武伸一郎
郷治将之	大川ひとみ	田邊ひろよ	水谷五郎
佐藤真司	大熊建司	高梨弘毅	村山重行
酒井敏昭	大原一郎	高柳和真	森松治修
鈴木洋一	勝本信吾	滝口山透	安田祐一郎
高田純一郎	川越清英	坪と富	柳山田俊茂
たね種とみ富	北谷村良	内藤井哲	山本邊俊
明楽浩隆	倉本林真	中江知文	渡中嶋真澄
石橋晃	佐藤慎司		

(62名)

天文学科

河合正人	小野剛	林正彦	嶺重慎
水谷英夫	仙石新		

(6名)

地球物理学科

石橋史朗	木田久美	中川一郎	三ヶ田均
いま給黎	隅健一	西村隆	道田豊
小川康雄	高柳昌弘	林よしゆき	山本哲也
小川隆一	坪井誠司	星野真弘	吉田真吾

(16名)

化学科

朝倉清高	小川章夫	小松原憲一	中野浩二
あま有賀哲也	小澤信彦	佐藤拓生	西田哲也
安藤香織	大谷比呂子	坂倉俊康	野中哲昌
伊藤真貢	大平学剛	坂元耕三	葉賀徹
石黒周	折山剛	鈴木博之	長谷川たい
石渡俊男	加藤淳一	田島裕之	橋本伸哉
市川智美	加藤千尋	坪井昌人	福田信夫
色川健一	久米博夫	富田哲爾	古野哲郎
海塩	黒沢雅夫	鳥山剛	曲秀明



松尾久昭	南勝敏 <small>まさとし</small>	山内俊昭	渡邊めぐみ
見附孝一郎	望月文裕	山内薰 <small>やまのうち</small>	(43名)

生物化学科

佐伯和彦	神田大輔 <small>こうだ</small>	藤原晴彦	三箇山俊文 <small>みやま</small>
岡田大助	白澤幸生 <small>ゆきお</small>	正井久雄	山山谷純 <small>やまや</small>
柏崎安男	高松信彦	松井泰 <small>やすし</small>	若松馨 <small>かおり</small>
金児知子 <small>かねこ</small>	竹内康裕	松江弘之	渡邊雄一郎
桑木共之	原三紀		(18名)

生物学科 (動物学課程)

秋葉俊彦	佐藤準	谷口泰史 <small>ありひろ</small>	松島俊也
楠真琴	鈴木純	橋本有弘	和田知可志 (8名)

生物学科 (植物学課程)

小此木道郎 <small>おこのぎ</small>	加藤潤一	竹中明夫	森安裕二
飯田章博 <small>まさちか</small>	梶江慎一	舘野正樹	岡崎芳次
岡村正愛			(9名)

生物学科 (人類学課程)

板坂俊典	針原伸二	別府正彦	(3名)
------	------	------	------

地学科 (地質学, 鉱物学課程)

井口隆	大路樹生 <small>たつお</small>	中西健司	前田晴良
海野進	小暮敏博	中野俊	松田文彰
尾形潔	津久井雅志	根井寿規 <small>ひさのり</small>	渡部芳夫 (12名)

地学科 (地理学課程)

佐藤一義 <small>としのり</small>	川口太郎	竹内綱吉	村重至康 <small>よしやす</small>
宮澤敏全	坂本善信	仁科淳司	渡邊満久
宇根寛			(9名)

(合計 259 名)

# 大学院修士課程修了者氏名 (理科系研究科)

昭和56年 3月30日

## 数 学

岩 淵 真 人	榎 一 郎	園 信太郎	徳 山 豪
栗 原 高 志	岡 本 久	高 崎 金 久	内 藤 浩 忠
中 島 匠 一	儀 我 美 一	館 山 光 一	前 田 博 信
朝 田 衛	河 野 俊 文	趙 康 治	山 崎 伸 彦
市 村 文 男	諏 訪 紀 幸	角 田 秀 一 郎	

( 19 名 )

## 情 報 科 学

池 田 哲 夫	森 本 真 一	平 賀 讓	山 口 和 紀
市 吉 伸 行	金 崎 克 己	村 尾 裕 一	

( 7 名 )

## 物 理 学

後 藤 典 夫	岡 本 涉	高 田 和 正	古 川 昭 雄
綿 村 哲	落 合 勲	高 橋 乙 文	古 林 孝 夫
赤 井 和 憲	影 山 達 也	多 田 吉 秀	本 宮 佳 典
阿久津 泰 弘	葛 西 淳 一	田 中 一 雄	満 田 和 久
阿 部 隆 幸	梶 野 敏 貴	寺 崎 太 洋	宮 田 健 治
有 坂 勝 史	加 藤 誠	中 井 豊	本 村 嘉 啓
家 富 洋	金 子 邦 彦	中 島 震	山 崎 隆 志
池 田 東 史 勝	木 村 薫	中 原 晴 彦	吉 田 伸 夫
井 関 豊	木 村 進	中 山 幹 夫	米 田 茂 隆
糸 山 浩	栗 林 壮 太 郎	中 山 隆 一	ルイス・アントニオ ・ダバロス
猿 渡 茂	黒 部 篤	乘 松 秀 行	廬 泰 男
延 与 秀 人	清 水 明	日 比 野 謙 一	和 気 泉
小 笠 原 宗 博	申 貴 子	平 本 尚	

( 51 名 )

## 天 文 学

沢 村 峰 夫	新 田 就 亮	山 縣 朋 彦	柳 桂 和
田 邊 俊 彦	花 輪 知 幸	李 宇 珉	

( 7 名 )

## 地 球 物 理 学

大 塚 聖	門 倉 真 二	瀬 川 律 子	比 屋 根 肇
大 山 素 宏	川 勝 均	夏 目 善 弘	日 置 幸 介
小 川 卓 司	川 崎 清	羽 田 亨	松 本 剛
加 藤 内 藏 進	杉 原 光 彦	早 川 基	萬 納 寺 信 崇

山本達人

横山正彦

(18名)

安宅彰隆  
石黒浩史  
岩澤伸治  
岩瀬公一  
植松真司  
上山昇哉  
太田真隆  
小川隆章  
小原秀夫

鏡節子  
加藤禮三  
車谷勝行  
坂入実章  
佐々木章子  
穴戸陽一郎  
嶋村道夫  
島村博司  
杉本隆司

化学

鈴木雅彦  
高木繁明  
竹内美寧  
釣田弘一  
直良幸宏  
野尻識俊  
萩原芳男  
端山行夫  
福田行夫  
古川行夫

星子知範  
増井曉夫  
松岡嘉夫  
村上正浩  
村田滋潔  
守本太郎  
山田信司  
山本正之  
吉田裕  
渡辺裕

(40名)

石黒幸一  
伊藤直人  
河田行弘  
桑原信彦

田村恵理子  
土居真樹  
長谷あきら

生物化学

松崎文雄  
飯哲夫  
柳田豊

湯浅聡  
横山みどり  
長洲直子

(13名)

石津谷敦子  
岩本裕之  
大石昇

小山純正  
平野丈夫

動物学

藤田一郎  
眞野幸子

三谷啓志  
藤田佐織

(9名)

秋山忍宣  
倉本宣

シヤシカラ・スワミ  
原弘志

植物学

三村徹郎

米賢二

(6名)

小泉政啓

齋藤成也

人類学

諏佐裕子

(3名)

鍋谷淳  
宇田聡三  
宇都浩三

小鷹長  
竹野直人

地質学

田村元紀  
泰信一

ナッシュ・ベリル・  
マーガレット  
柳井修一

(9名)

鉱物学

渋江靖弘

(1名)

地理学

松橋公治  
海野芳聖

江口卓  
鹿島薫

内藤正典

松原宏

(6名)

相関理化学

斎藤修二  
杉本譲  
五十嵐治一  
板倉真知樹

今城忍  
岩佐冬樹  
木村茂治  
木村尚志

久保田弘  
土屋憲彦  
成田良一  
藤井郁子

夫馬弘雄  
水町竜一  
山根康男

(15名)

科学史・科学基礎論

豊田眞理子  
江里口明俊

鬼頭秀一  
鈴木孝典

板垣良一

伊藤和行

(6名)

(合計210名)

● 泥棒がねらっている (盗難注意)

本郷構内は泥棒天国といわれています。いたるところで泥棒(盗難)の被害にあっています。あなたのちょっとした注意で被害をくいとめられます。

昭和56年3月16日付理学博士の学位授与者（15名）

専門課程	氏名	論文題目
物理学	宇都野 恵	チトクロムC <sub>3</sub> とヒドロゲナーゼ系のメスバウア効果による研究
同	加藤 潔	量子色力学におけるQ <sup>2</sup> 依存性をもつ部分分布関数とその軽粒子対発生への応用
同	柳沢 千明	ペトラのエネルギーにおける量子電磁力学の検証
人類学	植田 信太郎	霊長類における赤血球GPTの変異
学位規則第3条第3項該当	伊庭 英夫	Caulobacter Crescentus の細胞同期と染色体
同	熊倉 成和	X線回折法によるチエタン誘導体の研究
同	中山 堯	化学情報の表現と処理に関する研究
同	安部 和久	環境分析のためのラジカル試薬の研究
同	宮地 晶彦	ある特異なフーリエ掛け算作用素について
同	菅原 隆	チョウの交尾囊伸張受容器の構造と機能
同	小倉 明彦	ゾウリムシ細胞膜におけるイオンチャンネルの分布に関する研究
同	西川 恵子	エネルギー分散型液体X線回折装置の製作と液体の構造
同	岡田 昌人	ポリアミン酸化酵素の触媒機作に関する研究—特に基質認識について—
同	伊藤 谷生	後期中新世以降、北西秋田地方における2つの褶曲系
同	尚 基南	韓国・慶尚南道河東・山清地域に分布するハロイサイト鉱床の成因とハロイサイトの鉱物学的研究

昭和56年3月30日付理学博士の学位授与者（79名）

数 学	青木 貴史	無限階の擬微分作用素について
同	田島 慎一	コーシーリーマン多様体上の超局所解析と偏微分方程式系の正則解のなす層の接続問題について
同	百瀬 文之	モジュラー曲線X <sub>split</sub> (N)の有理点達について
物理学	秋廣 誠	超強磁場下におけるフェリ磁性酸化物のスピン相転移と輸送現象
同	今田 正俊	非線型場の統計力学とダイナミックス
同	岩崎 博行	400～730 MeV/cにおけるPP前方振幅の実数部対虚数部の比の測定
同	宇佐川 利幸	超流動 <sup>3</sup> Heの緩和を伴うスピン動力学

専門課程	氏名	論文課題
物理学	大川 正典	漸近的自由なゲージ理論に於ける高次 twist の効果
同	大橋 隆哉	MXB 1636-53からの X線バースト
同	押山 淳	金属ポリマー (SN) <sub>x</sub> 及びその鎖間化合物の電子構造と物性
同	木村 能章	紫膜の電気2色性
同	窪田 有一	エネルギーが1900~2000 MeVでの、1個以上のK <sup>o</sup> sを含む状態へのPP消滅反応の研究
同	巨瀬 勝美	Fe <sub>1+x</sub> Cr <sub>2-x</sub> O <sub>4</sub> (0 ≤ x ≤ 0.4)系における構造相転移
同	佐々田 博之	NH <sub>3</sub> 振動励起状態の高分解能分光
同	城後 尚純	明野空気シャワー観測装置で測定された μ/e 比
同	鈴木 敏一	低温重力波アンテナの開発
同	瀬尾 幸市	ゲージ理論におけるデュアル変換と可換ヒッグス模形における閉じこめ機構
同	十河 清	非線型力学系の研究
同	鄭 勝公	サイナーゴールドン系におけるバイオンの研究
同	藤 堂 清	ヘリウム薄膜の非線形振動
同	長野 正道	二次元及び三次元強結合プラズマの相関特性の研究
同	奈良 広一	液体 <sup>3</sup> He に於ける準粒子間相互作用
同	西野 仁	伝播する Lorentz 接続場を伴った超重力理論
同	馬場 基芳	コーナーリフレクターを用いた光領域 Ramsey共鳴の実験
同	三浦 裕一	<sup>3</sup> He - <sup>4</sup> He混合系の気相液相臨界点近傍に於ける臨界揺動
同	宮下 精二	長距離秩序を伴わない相転移
同	森 祥次郎	半導体ヘテロ接合と人工超格子の電子構造理論に関する研究
同	吉沢 英樹	低次元磁性体のスピンドイナミクスの中性子散乱による研究
同	林 青司	重いマヨラナニュートリノとレプトンフレーバーの非保存過程
天文学	浜部 勝	表面測光によるレンズ型および渦巻型銀河の構造の研究
地球物理学	岩崎 貴哉	粘弾性層を含む多層構造媒質中の準静的変形についての理論的研究 (表面荷重及び断層運動の場合) —上部マントルの粘性的構造—

専門課程	氏名	論文課題
地球物理学	江口孝雄	背弧海盆のサイスマテクトニクス及びプレート境界部における幾つかの問題
同	久保田雅久	福島海岸で観測される陸棚波
同	小玉一人	小笠原諸島及び西南日本四万十帯の古地磁気学：フィリピン海形成への応用
同	座間信作	不規則構造に対する地震波の挙動
同	柴崎和夫	大気NO <sub>2</sub> の研究：分光学的測定及び解釈
同	中西一郎	地球マントルの地震学的構造
同	浜田望	オリンピースピネル相転移機構
同	本田勝彦	岩石破壊の際の希ガス放出
化学	牛木秀治	発光プローブ法による溶液中での高分子鎖のダイナミクスと反応性の研究
同	大谷弘之	ピコ秒分光法による光化学初期過程の研究
同	大場茂	遷移金属および遷移金属錯体結晶中の電子密度分布
同	片桐元	TMPD結晶における再結合発光
同	久保田裕康	電子分光法による準安定励起原子と固代表面の分子との相互作用の研究
同	黄端熠	天然放射性核種による深海堆積年代の研究— <sup>230</sup> Th法と <sup>10</sup> Be法の比較
同	小杉信博	簡単な分子の光電子スペクトルにおける多電子効果
同	坂口喜生	光化学反応に対する磁場効果
同	正田晋一郎	ハロゲン化スズ(III)、フッ化セシウムなどの金属塩を用いる選択的合成反応の研究
同	菅和彦	光検出磁気共鳴による芳香族ガルボニルおよび芳香族アザ化合物の三重項りん光状態の研究
同	高橋純一	非分散型真空紫外水銀分析装置の開発、ならびにその地球化学応用
同	田辺潔	大気圧ヘリウムマイクロ波誘導プラズマ発光分光分析
同	角田欣一	高温炉中の原子・分子の生成機構並びに分光化学分析への応用に関する研究
同	永井尚生	長半減期放射性核種 <sup>202</sup> Pb の半減期測定
同	並河美鈴	植物化石中の有機物質およびエポキシフムラジェンの酸触媒閉環反応
同	森輝雄	フルオレン環に置換基を持つ9-(1-ナフチル)フルオレン誘導体と9-(8-メチル-1-ナフチル)フルオレン誘導体の回轉異性体の研究

専門課程	氏名	論文課題
生物化学	飯田和子	マクロファージによる赤血球貧食の初期過程の解析
同	今村真知子	クラミドモナスにおける無機炭素およびその他の諸物質のとりこみの調節：カルシウムによる促進およびアンモニアによる阻害
同	中山孝	分離神経細胞における細胞骨格蛋白質の合成
同	成瀬英典	棘皮動物卵表層の微小管再構成阻害因子
同	西田栄介	微小管再構成の制御：Ca <sup>2+</sup> 、Mg <sup>2+</sup> イオンと調節蛋白因子
同	服部成介	ブタ肝高分子量ポリペプチド鎖延長因子FF-1の精製およびその性質
動物学	赤坂甲治	ウニ初期胚における硫酸化多糖体とその生物学的役割に関する研究
同	川上速人	ラット肝細胞膜に存在するプロテオグリカンの生物学的機能に関する研究
同	河村孝介	無尾両生類の副腎に存在する夏細胞に関する組織細胞学的研究
同	モハメド・M・ ゴニモ	メダカ胸腺におよぼす放射線の影響に関する形態学的研究
同	小林裕太	視床下部・下垂体後葉系の加齢。特に老齢 Wistar/Tw 系ラットにおける多飲・多尿現象についての解析
同	高橋純夫	雌雄ラットにおける加齢にともなうプロラクチン分泌の変化に関する研究
同	増井徹	鳥類胚における卵黄嚢内胚葉の消化管間充織存在下での異形分化
植物学	沓掛和弘	特定DNA領域の逆位による貴伝子発現調節機構の研究
地質学	石渡明	西南日本内帯・夜久野オフィオライトの苦鉄質岩と超苦鉄質岩の岩石学
同	多田隆治	北日本新第三系珪藻質堆積物の続成変化
同	ポール・ フリーデル	房総半島南部における完新世の介形虫類
同	ベルナルド M. パルセロナ	ケゾン、マスバテ、北レイテ地域におけるフィリピン断層帯の断層の性質およびその構造発達への関わり
同	矢島道子	房総半島産後期更新世の介形虫類
物理学	佐々木信行	温泉産含鉛重晶石の地球化学的鉱物学的研究
相関理化学	高瀬晶彦	タングステンカルコゲナイドの光物性の研究
同	野口茂	大腸菌変異株を用いることによる、tRNA中の修飾ヌクレオシドQの構造、生合成、機能に関する研究
同	花城宏明	光励起アルゴンLMM Auger 電子のRead効果
同	山岸明彦	オオハネモ葉緑体のカチオン活量とクロフィルaの蛍光収率変化



## 編集後記

こういうのを非常事態というのであろう、原稿締切日がすぎても、読物記事が一本も集まらないばかりか、印刷所も決まっていない。仕方なく、非常持出し用の原稿を自分の頭からしぼり出す破

目になり、そして、亡友の原稿を借りて何とか恰好がついた。親友とはまことに有難いもので、死してなお助けてくれるのである。合掌。 (い)

毎月 1 日は

「省エネルギー」

の日です。

あなたです!

火事を出すのも

防ぐのも

---

編集:

飯高 茂 (数学)	内線 4053
平川 浩正 (物理)	4141
小平 桂一 (天文)	4258
露木 孝彦 (化学)	4357
尾本 恵市 (人類)	4482

---